粗悪品としての社会システム概念

東京女子大学 赤堀三郎

1 目的

社会システムという日本語は、今や、日常的語彙としても広く流通している。では、日本の社会学における社会システムという用語の扱いはどうだろうか。本報告の目的は、社会システムという日本語を社会学の専門用語として洗練させることではない。むしろ、社会システムという難題だらけの語を日本の社会学者が学術的文脈において不用意に使ってしまわないよう注意を喚起することにある。以上の意味で、本報告の関心は、本テーマセッション「社会学における概念・理論・方法の移植」の趣旨に沿うものであると考える。

2 方法

本報告で問うのは、社会学の専門用語としての社会システム(social system)という用語がどのように転変しているかである。文献を精査し、社会システムという言葉の用法を時系列的に整理することで、この問いに答えを与える。一口に社会システムといっても多くの論者による多様な用例がみられるが、ここでは、ヴィルフレード・パレート、ローレンス・J・ヘンダーソン、タルコット・パーソンズ、ニクラス・ルーマンという、知識社会学的な意味で影響関係がみられる社会システム(social system)の概念にのみ着目する。

3 結果

- ・ 1910 年代におけるパレートの社会システムの概念は、1930 年代にヘンダーソンによって米国に「移植」 される際に、彼のいう「生理学者の解釈」というフィルターにより、ホメオスタシス概念、ル・シャト リエの原理などの「調整」にかかわる考え方が混入し、その意味内容が変化している (Henderson 1935)。
- ・ 1950 年代にパーソンズによって社会学へと「移植」された社会システム (social system) の概念の意味は、 さらに変化している。パーソンズにおいては、社会システム (social system) は行為システムのサブシス テムのひとつであり、特に晩年のパーソンズの文献では、社会 (society) のシステムは社会システム (social system) とは明確に区別されている (Parsons 1951, 1966, 1971)。
- ・ ルーマンにおける Soziale Systeme と Gesellschaftssystem は、日本語に訳してしまうとどちらも「社会システム」となってしまうが、もちろん両者は異なる概念であり、混同してはならない。ルーマンのいう社会システム (Soziale Systeme) はコミュニケーションからなるとされている点、自己言及システムとされている点など、多くの点でパーソンズのそれと全く異なる (Luhmann 1984)。 さらに付け加えれば、ルーマンのいう Soziale Systeme の概念を社会システムという日本語で表現してしまうと、ただでさえわかりにくいその内容がさらに理解困難になる。

4 結論

以上のように、社会システム(social system)という言葉の意味は論者によって異なっていて、パレート、ヘンダーソン、パーソンズ、ルーマンそれぞれにおいて転変している。社会システムという日本語に至っては、social system と社会(society)のシステムとの区別がつかない上に、社会学史の蓄積が踏まえられておらず、定義すら覚束ない。以上の意味で、日本の社会学にとって社会システムという言葉は、少なくとも現状では、学術用語としての使用に耐えうるものではない。使いこなせないならば、使わないほうがましである。

文献

Henderson, Lawrence Joseph, 1935, *Pareto's General Sociology: A Physiologist's Interpretation*, Cambridge: Harvard University Press.

Luhmann, Niklas., 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. Parsons, Talcott, 1951, *The Social System*, New York: The Free Press.

- ———, 1966, Societies: Evolutionary and Comparative Perspectives, Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- ———, 1971, The System of Modern Societies, Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall